

はじめに

いよいよ2020年が目前に迫ってきた。この数年、われわれ一橋大学スポーツ科学研究室では、オリンピック・パラリンピックをめぐる喧騒に取り込まれることなく、しかし目を逸らすこともなく、研究ユニットとしてどう向き合うべきかを議論してきた。

われわれの立場は次の二点に集約されるだろう。ひとつは、オリンピック・パラリンピックをめぐる狂騒のなかで、なかなかスポットライトが当たらないような領域で、どのような人間性が発現しているのかを捉えようとするところである。もうひとつは、2020年ということに特段の意味づけをすることなく、人々の「通常モード」の営みを捉え続けようとするところである。

通底する動機は、2020年秋以降、東京の街や日本社会は「抜け殻」になるわけにいかないということである。世間一般の「ポスト2020」論において、オリンピック・パラリンピックを一過性に終わらせないという言説が蔓延るなか、われわれはむしろ一過性であるという事実を認めた上で、過ぎ去った後にちゃんと「通常営業」に戻ることができるかどうかを問おうとしている。

本年報前半の三つの論稿は、以上の共通の問題意識のなかでユニットの構成員それぞれが個別に研究関心を追究してきた成果である。後半三つの論稿は、より明確な意図を持った共同研究の中間的な成果と見てよい。坂を研究代表者とする科研費「グローバル化社会の多様性化する主体/コミュニティと『生活圏』としてのスポーツ研究」では、N・エリアスの「サバイバルユニット」概念を中心に据えて理論と現実の両面から検討を重ねてきた。

本研究室で従来から行ってきた「ゲスト研究会」では、釧路公立大学の北島義和先生をお招きし、アイルランドの農村における「歩く権利」をめぐる事例を報告していただいた。性質としては異なるはずの生活圏同士が空間的に重なりあってしまう現象として捉えられ、「サバイバルユニット」研究に重要な示唆を得た。大変充実した報告内容は言うに及ばず、門外漢からの的外れな質問にも丁寧におつきあいいただいたことに、この場を借りて厚く御礼申し上げる。

鈴木による報告は、構成員各人の関心領域が「サバイバルユニット」概念を中心にどのようにリンクし得るかを議論したものである。来年度以降、共同研究の最終成果に向かっていく上での基盤になる議論が出来たと自負するが、読者諸兄からの建設的批判をお願いしたい。最後の系数論文は、ここ数年積極的に推し進めてきた大学院生による研究成果発表であるが、これもサバイバルユニット研究の一事例として位置づけることができるだろう。

2020年を目前に控えながら、日本や世界で起きている「次の時代」の萌芽を見据えておくために、各フィールドで起きている「生存」を目指した人々の営みのダイナミズムを捉える共同研究へと発展させていきたいと考えている。

2019年11月30日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 鈴木 直文